

明治大正期のクリスマス受容

クリスマス・サンタクロースの諸表象

勝田 彩香

はじめに

クリスマスという行事は現代においても文化・宗教・商業など様々な側面を持つ。日本においてもはや大きな「祭り」の1つであり、海外から流入した他の行事と比べてその発展は顕著である。そこで、なぜここまで受容されるに至ったかに関心を持ち、鎖国明けの明治期から大正期にかけて、日本人、特に非キリスト教徒の一般庶民が海外の宗教的行事であるクリスマスをどのように受容していたか、そして当時の日本におけるクリスマスのイメージがどのようなものであったか調査する必要性を感じ、本調査を行った。

そもそもクリスマスの先行研究は、その多くが海外もしくはキリスト教におけるクリスマス自体についての研究である。日本におけるクリスマス受容やその歴史の研究はクラウス・クラハトと克美・タテノクラハト曰く、「海外研究者によるものは1960年代から、日本人研究者によるものは1970年代から⁽²⁾」であるが、海外におけるクリスマスの先行研究と比べてその数は非常に少ない。さらに、日本のクリスマスに関する研究を分類すると、日本のクリスマス自体ではない「作品内でのサンタクロース等のクリスマスの描かれ方の研究」と「日本のクリスマス自体の研究」とがあり、本論文の研究対象である後者のみの研究は、さらに数が少なくなる⁽³⁾。前者については例えば児童文学におけるサンタクロースのイメージを追った萩原雄一「児童文学におけるサンタクロースの研究⁽⁴⁾」があるが、この研究範囲は戦後以降かつ児童文学作品のみに限定されており、日本のクリスマスについて考えるには、より広範囲な調査が求められるように思う。

その中でドイツ人研究者クラウス・クラハトとその妻である克美・タテノクラハトによる「クリスマス—どうやって日本に定着したか—」は、数少ない日本のクリスマスそのものに関する研究の1つであり、私の調査した中で最も通史的かつ大きな情報量を有していた。これは日本におけるクリスマス受容、そして江戸後期から平成にかけてのクリスマスの様子や時代との関係を調査したもので、日本のクリスマスに関する貴重な研究と言える。しかし、長い期間を通史的にまとめるため、特徴的な出来事やトピックスに焦点が当てられており、詳細な庶民とクリスマス文化の関係や、クリスマス商戦が毎年どのようなものであったか等、細かい受容につい

ては記載されていない。つまり、明治大正期当時のクリスマスに関する新聞や雑誌等の資料は豊富に存在するにも関わらず、日本における明治大正期のクリスマス文化を詳細に追った研究はほとんどなされていないと言える。

本論においては明治大正期に期間を限定し、クラウス・クラハトと克美・タテノクラハトの調査資料に加え、この時期の新聞・雑誌・広告・書籍を調査した。とりわけ当時の非キリスト教徒によるクリスマス受容とその変容について分析を行うため、児童・主婦向けの雑誌や「朝日新聞」「読売新聞」といったより大衆向け新聞等、非キリスト教徒関連の資料を中心に調査を行った。

クリスマス文化は開国後、本格的に日本に流入して来た。しかし、日本人による明治期最初のクリスマス会(1874年)の頃はサンタクロースの姿も分からないほどの手探り状態であったことから、その認知度が低かったことがうかがえる。また、明治期中頃でもまだ国民にクリスマスが十分に広まっていないことはその紹介のされ方から見ることができる。例えば、次のような記述が存在する。

明廿五日はクリスマスと申し(中略)西洋文明國にて右のクリスマスに対するの人情は恰かも我國人が正月の元日に於けるが如くなり⁽⁶⁾

このように、明治期中頃においてクリスマスには「(12月25日は)クリスマスと申す」や「クリスマスと云ふ」のような、そもそも12月25日が何という名の祭であるかを紹介し、さらに「(日本で言う)正月のようだ」と、日本にある行事に例えて説明する必要があった。また、クリスマスおめでとう(メリークリスマス)は年賀、クリスマスプレゼントは歳暮やお年玉に言い換えて説明され、「めでたい日」「祝いの日」であることが当時の日本人にも分かるように記述されている。

一方で大正期になると「殆ど我國の年中行事のひとつと成った様な有様⁽⁷⁾」とされるように、クリスマスが日本に定着し、わざわざ「正月のようだ」と説明されることはなくなる。さらにクリスマスという言葉が行事自体の紹介文の中ではなく、「クリスマスの日に~した」というように、その「出来事」の記述に重点が置かれているのである。

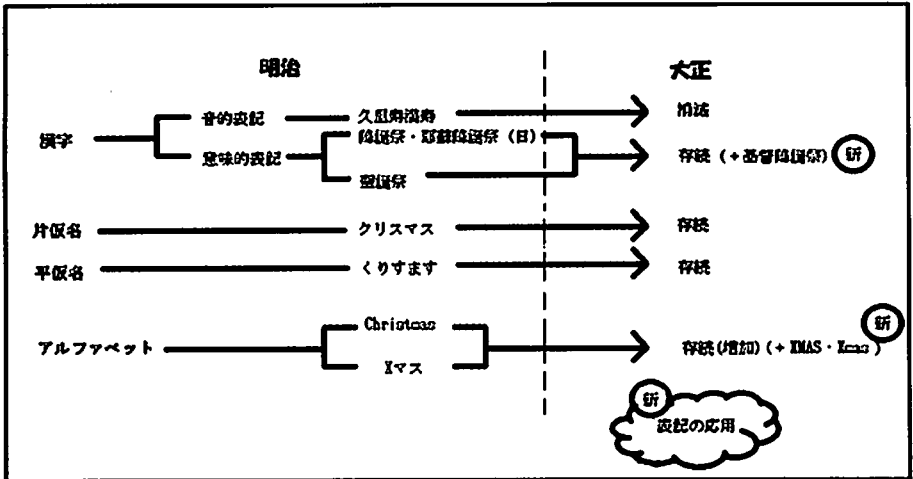
さらに、辞典類からも、明治期と大正期の認知度の違いを見ることができる。クリスマスという言葉自体の認知度も大正期になると大きく上がっており、説明が必要なほど新しい言葉だった明治期と比べると、より「よく知っているもの」・「言葉を聞いて人々が意味を解するもの」となっており、12月25日がクリスマスであるという認識がほぼ当たり前のもになっていたと考えられる。

以下、明治大正期のクリスマスの表記、さらにはサンタクロースや関連する事象

についてのイメージを論じていく。

1 クリスマスの表記

明治大正期の「クリスマス」の表記には片仮名・平仮名・漢字・アルファベットの4つが存在するが、このような表記に関する調査は先行研究ではなされておらず、以下は雑誌や新聞等の資料を調査した結果である。漢字による表記方法はさらに細分化することが可能であり、大正期にはそれらの表記を用いて、クリスマス関連の事物を表す「表記の応用」も見られる。明治大正期間での表記の変化をまとめると【図】のようになる。



まずは、「クリスマス」という片仮名表記は、現代と同様に明治大正期も最も多く用いられており、新聞・広告・雑誌等様々な資料で登場する。片仮名表記は明治大正期共に、「漢字のふり仮名(ルビ)として表記される場合」と「片仮名の言葉として表記される場合」の2つの場合が存在する。ふり仮名として登場する場合、明治期には平仮名表記であることもあるが、大正期は片仮名表記に統一されているという違いもある。次に、明治大正期それぞれの片仮名表記について考察する。

明治期には「クリスマス」だけでなく、「キリストマス」(『読売新聞』1875.12.25)や「クリストマス」のようにクリスマスを表す片仮名表記にもバリエーションが存在する。そもそもクリスマスの語源は「クリス christ とマス mas の二語よりなる⁽⁹⁾」という。「クリス (Christ)」とはキリストの意で、「マス (mas)」にはミサの意があるので、「キリストの(降誕を祝う)ミサ」という意味であろう。他にも「Christ」を「クリスト」と表記している例(『朝日新聞』1911.12.25)があることから、「キリストマス」は本来発音しない「Christ」の「t」を発音してしま

った結果の表記であると考えられる。表記事例は圧倒的に「クリスマス」と表記するケースが多いが、このように明治期には「クリスマス」以外の片仮名表記も存在する。

一方で、大正期の片仮名表記は「クリスマス」で統一されており、その他の表記は見られなかった。「朝日新聞」の広告では特にこの片仮名表記が多用されており（「朝日新聞」1926.12.20）、その他は英語表記の「Xmas」や平仮名表記の「くりすます」と表記され、「降誕」等の漢字表記はほとんど使用されていない。

大正期の特徴としては、「クリスマス樹・聖樹（＝クリスマスツリー⁽¹¹⁾）」という表記のように、「クリスマス」という片仮名表記に漢字の「樹」を足すような応用的な用いられ方が多くなされている点が挙げられる。以上のことから、大正期は片仮名の表記方法が統一され、さらに複合的表記や表記の応用がなされるほど「クリスマス」という片仮名の表記がほぼ完全に人々に認知されていたと考えられる。

次に平仮名の「くりすます」という表記は複合的表記を除いた純粋なクリスマス表記において、明治大正期共に他の表記方法よりもその数は少ない。表記のバリエーションはないが、明治期はふり仮名（ルビ）としても用いられている⁽¹²⁾のに対して、大正期はふり仮名ではなく、平仮名の「言葉」として表記される⁽¹³⁾という違いがある。また、大正期においても「くりすます即ち耶蘇聖誕祭は…⁽¹⁴⁾」と言いつまわれていることから、当時の人には平仮名表記よりも漢字表記の方が意味を取りやすかった可能性が考えられる。以上のことから、明治大正期における平仮名表記の使用頻度やその認知度は、他の表記方法よりも低かったのである。

3つ目の表記方法として漢字表記（降誕祭・耶蘇降誕祭・基督降誕祭・聖誕祭）が挙げられる。これは明治大正期共に、新聞記事・書籍・雑誌等様々な表現の中に多く見ることができ、「ふり仮名（ルビ）」がふられているケースが多い。先述したが、明治期は平仮名もしくは片仮名、大正期は片仮名のふり仮名がふられている。次に、明治大正期それぞれの時代の漢字表記について論じる。

まず、明治期の漢字表記はクリスマスの意味に沿った意味的な表記と、音に漢字を当てた音的な表記の2つに分かれ、さらに意味的な表記は「聖誕」と「降誕」のどちらの言葉を使うかで分かれる。

「意味的な表記」は、音としては「クリスマス」とは読めないが、クリスマスの意味を汲んだ漢字を用いる。「降誕祭」・「耶蘇降誕祭」・「聖誕祭」のようなものがこれに該当する（『読売新聞』1911.12.4等）。この降誕と聖誕は「キリストが生まれた日である」という意味を持つ言葉であり、故に音ではなく言葉の意味から生み出された表記と言える。また、ここから派生し「耶蘇」という言葉を足した「耶蘇降誕祭」「耶蘇降誕日」という表記方法も見ることができる。

もうひとつの表記方法は「音的な表記」である。これは意味的な表記と違い、漢字そのものの意味はクリスマスとの関連性を持たないが、音読みするとクリスマスと読める表記方法である。この表記は唯一、もみちみどり著「久里寿満寿」の表紙においてのみ見られるもので、漢字表記の横には平仮名でふり仮名がふってある。また、「寿」という文字からおめでたい印象を受ける表記でもある。しかし、この表記は「久里寿満寿」の表紙部分のみに見られ、同書の内容部分では片仮名の表記がなされている。このことからこの書籍のみの特殊な表記方法であったことが推測できる。

明治期に対して、大正期の漢字表記は、「降誕」「聖誕」「耶蘇」「基督」のように、全て「キリストの誕生日である」という意味を読み取らせる「意味的な表記」であり、明治期の「久里寿満寿」のような音的な表記方法は見られない。また、大正期の意味的な表記方法の種類は明治期と同様に、大きく分けて「降誕祭」「聖誕祭」の2種類であり、そこに大きな変化は見られないが、多少バリエーションが増えている。また、明治期と同様に漢字表記にはふり仮名がふられる場合があるが、大正期のふり仮名は明治期と違い、圧倒的に片仮名が多い。用いられる漢字は、「降誕」（『朝日新聞』1919.12.24等）という言葉を用いた表記の方が、「聖誕」（『朝日新聞』1913.12.10）よりもはるかに多く、明治期と同様に、「耶蘇降誕祭」・「基督降誕祭」（『朝日新聞』1913.1.1等）のような、キリストを表す「耶蘇」や「基督」という言葉が「降誕祭」の頭につく場合がある。「耶蘇降誕祭」は大正期の国語辞典にも併記されており、辞書に併記されるほどその意を解しやすい表記方法であったと考えられる⁽¹⁶⁾。これらの漢字は「キリストの誕生日である」という意味を含んだものであるが、この表記が登場する資料はキリスト教関連か否かは関係なく、様々な資料で確認できる。

その他、漢字と仮名表記以外の表記としてはアルファベット表記（Xmas・XMAS・Christmas）、そして「漢字+片仮名（片仮名+漢字）」や「漢字+アルファベット」等の「複合的な表記」と、漢字の意味的な表記を用いてクリスマスに関連する事物を表す「表記の応用」が見られる。

アルファベット表記は、平仮名表記と同様に他と比べて量が少なく、広告で用いられる場合が主であるため、客の目をひくための表現として用いられていた可能性が高いと考えられる。明治期は多くの場合「Christmas」という純粋な英単語表記が用いられ、一部「Xマス」のような「X」を用いたものも用いられる（『読売新聞』1910.12.26）。大正期には「Xmas」・「XMAS」（『朝日新聞』1922.12.17ヤギヤ広告等）のように、「X」を用いたアルファベット表記が増加している。

2 サンタクロースの登場

1874年に原胤昭によって開催された日本人による明治期最初のクリスマス会にて、侍風のサンタクロースが登場した。このサンタクロースの姿について、この会に参加したキリスト教徒の田村直臣は「日本的に神を着し、老人の白髯を長くつけた仮面を冠⁽¹⁷⁾って居つた」と述べている。また、佐波亘は「大小を差し、大森カツラをかぶり、殿様風の身拵へ厳⁽¹⁸⁾しき扮装」と描写している。このサンタクロースは「侍」の様な恰好をしていたことになる。残念ながら当時の新聞等にはこのサンタクロースは掲載されていないが、田村直臣はこのクリスマス会に参加し、佐波亘はこの時代に生きていた人物である植村正久の娘婿として植村正久の話を著しているため、日本風の侍サンタクロースが存在したことは十分考えられる。しかしながら、このようなサンタクロースが登場するのはこの時のみであり、以後その登場は見受けられない。このようなサンタクロースが登場した最たる理由としては、当時のサンタクロースの認知度の低さが考えられる。

我等は未だサンタクロスと云ふものは何ものなるや見た事もなく、又如何なる理由で、サンタクロスなるものが、クリスマスの祝會に縁のあるものなのか少しも知らなかった。…名前をきくだけでも、奇な念に充⁽¹⁹⁾されて居つた。

田村直臣がこう述べるように、鎖国が明けてキリスト教が解禁したばかりであったため、キリスト教徒の田村直臣ですらサンタクロースがどのようなものか知らない状況であったのである。サンタクロースの姿が分からず、「日本風の趣向で」という考えがあったため、試行錯誤の末このような侍サンタクロースが生み出されたと考える。装身具の袴も大小も男性が正装時に身につけるものであるため、クリスマスは聖なる日であり、サンタクロースはそんな大切な日の人物であるから、正装した男性としたのだろうか。当時このサンタクロースに扮したのが戸田忠厚という男性であったため、男性の正装にしたことも考えられるが、女学校で行ったクリスマス会でわざわざ男性にサンタクロース役を担わせていることから、サンタクロースが男性（御爺さん）であることは知っていたようだ。

サンタクロースの表記の大部分は現代と同様に「サンタクロース」であるが、その他の表記として「ナンタクロース」（『読売新聞』1907.12.18）、「さんたくろう」、「三太郎」、「サンタクロス」⁽²⁰⁾、「サンタクロース」（『読売新聞』1907.12.18等）、「サンタクロオス」⁽²¹⁾、「聖クロス」（『読売新聞』1912.12.7）、「サンタケロース」⁽²²⁾が挙げられ、このうち「さんたくろう」と「三太郎」は明治期の「さんたくろう」⁽²³⁾でのみ

見られる。「サンタクロス」「サンタクローズ」「サンタクロオス」の表記は英語の「Santa Claus」の発音の仕方による違いであるが、明治期には「三太九郎」の様な音的な当て字や「ナンタクローズ」のような本来の「Santa Claus」から少々離れた表記もなされており、大正期よりも表記が定まっていなように感じる。大正期の表記である「聖クロス」はキリスト教的な意味を含む「聖」と片仮名表記を足したものであり、先述した大正期の「表記の応用」と同様の表記方法と考えられる。

3 サンタクロースの視覚的イメージ

当時のサンタクロースの容姿や服装等の「視覚的イメージ」については文章・絵や図、写真等様々な媒体から情報を得ることができる。明治期は大正期と比べ、サンタクロースに関する資料は少なく、クラウス・クラハトと克美・タテノクラハトは「『朝日新聞』にサンタクロースを起用したコマーシャルが開始するのが明治39年(1906年)⁽²⁴⁾」、1900年の『さんたくろう』の表紙を「日本最初のサンタクロースの絵⁽²⁵⁾」としている。このコマーシャルが広告を意味するか否かははっきりとは分からないが、本論文の調査においても、「朝日新聞」掲載の広告にサンタクロースの絵が起用され始めるのは1906年からであり、それ以前のサンタクロースの認知度は広告に利用するまでには至っていなかったと考える。また、日本最初のサンタクロースの絵についても、『さんたくろう』以前の絵や写真においてその姿は確認できていないため、先行研究と同様の見解を持っている。その後、明治末期からは『朝日新聞』12月の広告にサンタクロースの絵が用いられるようになり、大正期に入ると、多少の差違はあるが、サンタクロースの姿がほぼ固定化され、多用されるようになる。

つづいて、サンタクロースの姿の特徴をまとめると、次の5つの点が挙げられる。先行研究においては特異なサンタクロースやその扱われ方は多少取り上げられるが、細かいサンタクロースの姿が論じられることはないため、本論では新聞・雑誌等の各資料から得た情報を元にサンタクロースの視覚的な特徴を考察した。

1つ目は総じて「おじいさん・おじさん」と呼ばれる年齢の男性であるということである。【表1】にあるように爺、老翁、おじいさん(お爺さん・お老人)、おじさん(小父さん・伯父さん)のように用いられる言葉は様々で、はっきりと年齢を特定するのは難しいが、ある程度年齢のいった男性であると考えられる。また、今回調査したサンタクロースは全て「男性」であり、顔の深いしわや白髭などから「おじいさん」を思わせる絵が多い。中には「杖」を持ったサンタクロースが登場することもあるが、これも「おじいさんである⁽²⁶⁾」というイメージから来る表現であろう。

名称	出典例
老翁	もみちみどり著「久里寿満寿」(1895年、メソヂスト出版社)
爺	『読売新聞』1912.12.25
伯父さん	『朝日新聞』1907.12.17
お老人	某家庭教師著「クリスマスが姉妹に与えたる喜び」p.15(櫻楓會館「家庭第2巻13号」1910年12月、精美堂)
お爺さん	秋庭俊彦著「クリスマス 町長さんの園物」(鈴木三重吉編「赤い鳥第13巻6号」1924年12月1日、赤い鳥社)
小父さん	池部鈞作「漫画のクリスマス」(野村久太郎編「新家庭第3巻第12号」1918年12月1日、玄文社)

表1

これらのサンタクロースは海外から来るというような描写があり、絵においても西洋人の外見をしたものが多い。「北の極なる寒國」⁽²⁷⁾の人間と表されることがあるため、北の寒い異国から訪れるとされていたと考えられる。また、これは日本のサンタクロース像ではないが、有本

司「クリスマス雑記」⁽²⁸⁾では各国のクリスマス文化について紹介され、ロシアやイタリアのサンタクロースは老女だとも紹介されている。

2つ目の特徴は「白髯と白髪」である。その容姿は「白い髯に緋の衣」(『朝日新聞』1920.12.23)、「サンタクロースのやうに白い長い髯」⁽²⁹⁾、「頭もお髯も眞白」⁽³¹⁾のように「白髯・白髪」と記述される。ただ「髯」とだけの場合もあるが、「白」がつく表現の方が顕著である。絵において帽子により白髪を確認できない場合も多いが、広告や挿絵等においてもサンタクロースは白髯や白髪として描かれ(『朝日新聞』1907.12.18)、それ以外の色は見られない。また、カラーの絵においてもサンタクロースは白髯である⁽³²⁾。このように、白髯・白髪の記述が多いことや、絵や広告等においても白髯・白髪のみであることから「サンタクロース=白髯・白髪」と考えられる。

3つ目に、服装が「サンタ帽に長靴」であることが挙げられる。一部異なる帽子をかぶっているサンタクロースもいるが、明治大正期共に大部分のサンタクロースは長靴とサンタ帽を身につけ、新聞記事においても「頭にピラミッド形の帽を冠り(『朝日新聞』1907.12.28)」と表現されている。

また、服の色については明治大正期共に広告など白黒絵の場合、黒中心の服を着用している(『朝日新聞』1917.12.22)。ただし、一部白と黒の配分が逆である白中心の服のサンタクロースや、真っ白な服のサンタクロースも存在する(『朝日新聞』1907.12.20)。さらに白中心の服の場合、帽子の白黒も反転している場合と、服のみ白で描かれる場合との2パターンが存在する(『朝日新聞』1922.12.22)。

現代でサンタクロースと言えば「赤い服」であるが、当時のサンタクロースの服の色も1907年の段階で「緋羅紗の服」(『朝日新聞』1907.12.17)、「身に赤衣を纏ひ」(『朝日新聞』1907.12.28)、「真っ赤な服をつけて白髪の赤い面を冠りサンタクロースに装ひ」(『読売新聞』1914.12.13)とあるように「赤色」もしくは「緋色」である。そしてカラーの絵でも、1921年の時点で赤い服のサンタクロースが描かれてい

⁽³⁴⁾る。コカ・コーラ社は赤い服のサンタクロースに関して、1931年から描かれていた自社の宣伝用のサンタクロースのイメージが「定着した」としているが、先述した通り「白髯」は既に明治期の日本に存在し、「帽子」も「赤い服」も1907年には存在していた。このことに加え、他の色で描かれたサンタクロースが発見できていないことから、コカ・コーラ社のものより前に、既に日本では赤服白髯のサンタクロースのイメージが形成されていたと考えられる。

4つ目は「大きな袋にプレゼント」を持っていることであり、多数の絵や広告でもその姿を多く見ることができる。その袋の中身は子供たちへのプレゼントであり、中から贈り物を取り出す場面も描かれる。一方でロバにプレゼントを担がせているものや、⁽³⁵⁾プレゼントを背負うもしくは抱えるといった広告（『朝日新聞』1907.12.3）等のように、大きな袋を明確には描写しない場合もある。このことから、袋はあくまでもプレゼントを入れるものとして描かれているのであり、「大きな袋を持っているのがサンタクロース」というイメージは「サンタクロースはプレゼントを持っている」というイメージが基盤にある表現と考えられる。

最後の特徴は体型の描写であり、細いサンタクロース・ふくよかなサンタクロース、そして中肉中背のサンタクロース（『朝日新聞』1912.12.10等）が存在する。細い体型のサンタクロースはふくよか・中肉中背なものより少ないが、顔部分のみのものや判別がつけにくい絵もあり、どれが多いかは言いきれない。ただ、大正期と比べて、明治期の『朝日新聞』広告のサンタクロースには極端な体格差は感じられず、中肉中背もしくは少し細身のものが多い。

4 サンタクロース表象とその関連事物

サンタクロースには一緒に登場する動物や物が存在する。明治大正期のこれらについての研究はなされていないため、各表現から考察する。広告等の場合、その企業の商品がサンタクロースと一緒に描かれることがある。しかしこれは宣伝目的で意図的に入れられているため、ここでは含めないものとする。また、大きな袋とプレゼントが登場することはサンタクロースの特徴の部分で先述したため省略する。

サンタクロースと一緒に描かれるものとして、まず挙げられるのが「動物」である。各表現の中には、サンタクロースのそりを引く、もしくは側にいる動物として、「トナカイ」もしくは「⁽⁴¹⁾鹿」、その他「馬（ロバの可能性もある）」⁽⁴²⁾といったものが登場する。

動物が統一されていないものの、この中でもサンタクロースと一緒に描かれることが多いのは「トナカイ」もしくは「鹿」と思しき動物であり、それらはサンタクロースのそりを引いている（『朝日新聞』1909.12.18及び1923.12.20）。トナカイは

そりとの関係が描かれることがあるため、そりと関連性がある動物であることは考えられる。ただし、ここではクリスマスとの関連性は記述されておらず、他の資料でもそりをサンタクロースが使うイメージは存在するが、それを引く動物については記述されていないことから、当時のサンタクロースのイメージにおいて、そりとトナカイの関係は必ずしもセットであるとは言いきれない。また、文字媒体において「鹿」か「トナカイ」かが明記されるのは毛利薫子訳『柊山のクリスマス』における「鹿」のみであり、「トナカイ」という言葉を発見することはできなかったため、絵や広告の動物がどちらなのかを見分けることは困難である。

鹿やトナカイ以外に一部のクリスマスの広告では、サンタクロースのそりではないものの、「馬」がそりを引く絵も見られ（『朝日新聞1926.12.13』）、その他「ロバ」もしくは「子馬」がサンタクロースと共に描かれることもある。また、ベルギーのサンタクロースは「白馬でやってくる」という記述もあり、必ずしも全世界でトナカイのみがそりを引く訳ではないことがうかがえることから、「サンタクロースのそりを引くのはトナカイ」という現代のイメージは明治大正期にはまだ固まっていなかったようだ。

動物の他に、サンタクロースと一緒に登場するものとしては「煙突」が挙げられる。サンタクロースは煙突から（入って）来る存在として描かれ、広告等の絵でもそれを見ることができる（『朝日新聞』1925.12.25等）。ドイツのクリスマスの習慣が「(子供に) サンタが煙突からやってくるものと考えさせてしまった」とされている資料もあり、もともと海外に存在した「煙突からくる」という考えが日本にも

イメージ	出典例
プレゼントをくれる	海老沢亮著「家庭と修養」(1914年、警醒社書店)
(枕元・靴下の中など)	『読売新聞』1912.12.25
優しい人が好い	『読売新聞』1912.12.25 川路柳虹著「Xマス夜話 夢の賜物」(野村久太郎編「新家庭第2巻第12号」1917年12月1日、玄文社)p.59
神の使い・神様・天国から来た	伏庭俊彦著「町長さんの贈物」(鈴木三重吉編「赤い鳥第13巻6号」1924年12月1日、赤い鳥社)
(良い)子供の味方・子供好き	『読売新聞』1912.12.25
にこにこ	『読売新聞』1912.12.25
夜に、子供が寝てからやってくる	某家庭教師著「クリスマスが姉妹に与えたる喜び」(櫻楓會編「家庭第2巻13号」1910年12月、精美堂)p.15
悪い子にお仕置きする	『読売新聞』1918.12.20
福祉の存在・情け深い	『朝日新聞』1906.12.27
幸福をもたらす	『朝日新聞』1906.12.25
実在しない(本当は親)	高橋正治訳註「CHRISTMAS(英文)」(森下岩太郎編「新青年第2巻第13号」1921年12月10日、博文館)

表2

入っていたことが考えられる。

明治大正期に存在するサンタクロースのイメージをまとめると【表2】のようになり、役割や人柄、その存在について等様々である。また、子供にプレゼントを配る存在というイメージがとりわけ強いことから、「子供にとってのサンタクロース」として描かれる傾向がある。

最も多く見られるのが「プレゼントをくれる存在」というイメージであり、これは「神の使いとして」や「良い子にプレゼントをくれる」等他のイメージにも関係している。プレゼントをくれる場合、「手渡し」・「枕元」・「靴下に入れる」の3つのパターンがあり、特に、吊るした靴下の中にプレゼントが入る描写はたくさんの絵や文章において見られる⁽⁵¹⁾。そのため、靴下もクリスマスに関連する代表的な物として広告の絵や明治屋等のクリスマスプレゼント用の商品に用いられる。

人柄については、大部分が「温厚で優しい」人物として描かれるが、一方で「悪い子にお仕置きをする」存在として描かれる場合もあり（『読売新聞』1918.12.20）、良い子には優しく、悪い子にはお仕置きをするサンタクロースもいくつか見られる。

また、サンタクロースは「実在せず、本当は親等の大人である」といった表現も多い。当時の現実の子供にプレゼントを与えていたのはおそらく親もしくはその他の大人であり、このような「事実」が明治大正期の表現の中にも現れている。例えば、「サンタクロースと云ふお老人は、ほんとうは居ないのです。（中略）お母さんや、先生や、伯母さん等が、子供の大好きな玩具を贈物して下さるのです。」⁽⁵²⁾、あるいは、子供はサンタクロースがプレゼントをくれるのを夢見て眠るが、実際は親がそっとプレゼントを靴下に入れるといった記述があり⁽⁵³⁾、その他子供がサンタクロースに扮しているのが父親だと暴く漫画もある⁽⁵⁴⁾。一方で、子供を対象としたお話ではサンタクロースを夢見た子供の前に実際にはサンタクロースは現れず、代わりに大人が子供にプレゼントなどを与えるという話はあるが、明確にサンタクロースの実在を否定する表現はない。

このように大人もしくは青年程度にははっきりと「いない」と表現される一方で、子供向けの読み物を読むくらいの子供に対しては存在の有無がぼやかされており、代役は立てても存在の否定は行われていない。子供には夢を持たせる一方で、大人には「サンタクロースは実在しない」というイメージがあったことがうかがえる。

おわりに

本論文は明治大正期におけるクリスマスの研究の一部であり、この他にクリスマスの植物（ツリー等）、食べ物（ケーキや料理）、パーティー（帝国ホテルのパー

ティーを含む)、映像と音楽、プレゼントの種類や内容、そしてクリスマス商戦についての調査も行っている。時がたつにつれて、その認知度も格段に上がり様々な面で「統一化」が見られるが、特異な例が無くなっていくだけで、まだまだその表記もイメージも多様である。また、盛り上がり、様々な分野に広がるからこそその表現の多様化が生じている部分も存在する。今後は受容過程やそのイメージに加え、多様化するクリスマスがいかにまとまっていくかも表現の観点から考察し、日本のクリスマスを研究していきたい。

- (1) 海外のクリスマス研究にはジェリー・ボウラー『図説クリスマス百科事典』(2007年、修風舎)、若林ひとみ『クリスマスの文化史(新装版)』等がある。
- (2) クラウス・クラハト、克美・タテノクラハト『クリスマス—どうやって日本に定着したか—』(1999年、角川書店) p.7。
- (3) 日本のクリスマス自体の書籍としては、クリスマスおもしろ事典刊行委員会編『クリスマスおもしろ事典』(2003年、日本キリスト教団出版局)というものもあるが、研究というより雑学書のようにあり、特異なトピックスのみを抽出して紹介しているため、当時のクリスマス全体を知ることはできない。
- (4) 萩原雄一『児童文学におけるサンタクロースの研究』(1998年、高文堂出版)。
- (5) 田村直臣『信仰五十年史』(1924年、警視社書店) p.31。
- (6) 「クリスマスの事」(野村久太郎編『新家庭第3巻第12号』1918年12月1日、玄文社) p.195。
- (7) 高橋正治訳註「CHRITHMAS(英文)」(森下岩太郎編『新青年第2巻第13号』1921年12月10日、博文館) p.72。
- (8) 明治期の国語辞典『日本新辞林』(1897年)・『帝国大辞典』(1898年)には「クリスマス」という言葉は掲載されていないが、大正期の『言泉』(1921年~22年)・『大日本国語辞典』(1915年~1919年)には見ることができる。これに加えて『言泉』には「クリスマスツリー」と「クリスマスケーキ」、『大日本国語辞典』には「クリスマスケーキ」も掲載されているため、辞書に関連の言葉が併記されるほど、「クリスマス」という言葉が認知されていたことがうかがえる。
- (9) 西舘・吉田熹六『西洋風俗記』(1887年、駁々堂) p.37。
- (10) 杉本つとむ『語源海』(2005年、東京書籍株式会社) p.258。
- (11) 内田魯庵『バクダン』(1926年、春秋社) p.53等。
- (12) 『読売新聞』1909.12.25、もみぢみどり『久里寿満寿』(1895年、メソヂスト出版舎)表紙等。
- (13) 上村勝爾『樹木百話』(1918年、成美堂書店) p.56、『読売新聞』1916.12.25等に見られる。
- (14) 『樹木百話』(前掲) p.56。
- (15) 落合直文著『言泉』(1922年、大倉書店) p.1174等で見られる。
- (16) 『言泉』(前掲) p.1174。

- (17) 「信仰五十年史」(前掲) p.31。
- (18) 佐波巨樹「植村正久と其の時代第二卷」(1938年、教文館) p.508。
- (19) 「信仰五十年史」(前掲) p.31。
- (20) 吉田絃二郎「柿丸と梨丸」(1923年、京文社)、某家庭教師「クリスマスが姉妹に与えたる喜び」(櫻楓會編「家庭第2巻13号」1910年12月、精美堂)等で見られる。
- (21) 芥川龍之介「少年」(「中央公論」1924年4月、中央公論社)→芥川龍之介「芥川龍之介全集5」(1987年、筑摩書房)。
- (22) 生田葵山「金の林檎」(巖谷季雄著「少年世界第9巻16号」(1903年12月5日、博文館)。
- (23) 進藤信義「さんたくろう」(1900年、教文館)。
- (24) 「クリスマス—どうやって日本に定着したか—」(前掲) p.104。
- (25) 「クリスマス—どうやって日本に定着したか—」(前掲) p.57。
- (26) 川路柳虹「X マス夜話夢の賜物」(野村久太郎編「新家庭第2巻第12号」1917年12月1日、玄文社) p.56~59。
- (27) 北村壽夫「静かな夢」(木元平太郎編「童話第2巻12号」1921年11月1日、コドモ社) p.18~31。
- (28) 「久里寿満寿」(前掲) p.5。
- (29) 黒澤武之輔編「カトリック第5巻第12号」(1925年11月1日、公教青年会) p.32~33に収録。
- (30) 秋庭俊彦「クリスマス 町長さんの贈物」(鈴木三重吉編「赤い鳥第13巻6号」1924年12月1日、赤い鳥社) p.89。
- (31) 「クリスマスが姉妹に与えたる喜び」(前掲) p.15。
- (32) 斎藤佐次郎編「金の船 第3巻第12号」(1921年12月1日、キンノツノ社)表紙。
- (33) 「さんたくろう」(前掲)表紙。
- (34) 「金の船 第3巻第12号」(前掲)表紙。
- (35) コカ・コーラ社 (http://www.tokyo.ccbcc.co.jp/factory/history_02.html)、2012年5月5日参照。
- (36) 「久里寿満寿」(前掲)や「X マス夜話 夢の賜物」(前掲) p.56~59等で見られる。
- (37) その他、「クリスマスが姉妹に与えたる喜び」(前掲) p.15、「朝日新聞」1906.12.22の丸善の広告、「金の船第6巻第12号」(前掲)表紙等で見られる。
- (38) 「X マス夜話 夢の賜物」(前掲) p.56~59。
- (39) 「さんたくろう」(前掲)表紙。
- (40) 小野浩「つかまえて見たサンタクロース」(鈴木三重吉編「赤い鳥第17巻6号」1926年12月1日、赤い鳥社) p.54。
- (41) 「朝日新聞」1908.12.18.の広告、毛利薫子訳「移山のクリスマス」(1910年、管醒社)。
- (42) 「朝日新聞」1926.12.13.の広告、「さんたくろう」(前掲)表紙。
- (43) 「クリスマスが姉妹に與へた恵み」(前掲)挿絵、「金の船 第3巻第12号」(前掲)表紙、「朝日新聞」1923.12.20の粉ミルクの新聞広告等で見られる。
- (44) 地理研究会「地理趣味から知識へ」(1926年、岡田文祥堂)。

- (45) 「クリスマス 町長さんの贈物」(前掲) p.87~89に収録。
- (46) 「移山のクリスマス」(前掲)。
- (47) 「さんたくろう」(前掲) 表紙。
- (48) 有本司「クリスマス雑記」(黒澤武之輔編「カトリック第5巻第12号」1925年11月1日、公教青年会) p.32。
- (49) 「Xマス夜話 夢の贈物」(前掲)、「クリスマスが姉妹に与えたる喜び」(前掲) p.15、「読売新聞」1912.12.25、「CHRITHMAS (英文)」(前掲) p.72等で見られる。
- (50) 「クリスマス雑記」(前掲) p.33。
- (51) 羽仁吉一発・稲「子供之友第10巻第12号」(1923年1月1日、婦人之友社)。
- (52) 「クリスマスが姉妹に与えたる喜び」(前掲) p.16。
- (53) 「CHRITHMAS (英文)」(前掲) p.72。
- (54) 池部鈞「漫遊園のクリスマス」(野村久太郎編「新家庭第3巻第12号」1918年12月1日、玄文社) p.72~73。
- (55) 「Xマス夜話 夢の贈物」(前掲) 等。

(かつた・あやか/早稲田大学)